

町史だより

～地域をみつめる～

今回は、翁長村（現・字翁長）出身である比嘉春潮（一八八三～一九七七年）という人物についてお話しします。

春潮は、廃藩後、首里から田舎下りした士族の家庭に生まれ、一七歳まで翁長村で過ごし、春潮の父が、翁長村のウツチガシー（字の書記）職について生計を立てていました。

春潮は、青年期に教員、新聞記者、社会運動家として活躍し、その後、柳田国男や伊波普猷らとともに、沖縄の歴史文化研究に大きな功績を残しました。

その著作の中でも、「翁長旧事談」では、綱引きや村芝居などの民俗行事や、天然痘の流行など、明治期の西原・翁長を知る上で重要な資料となっています。また、「沖縄本島の神隠し」では、実際に翁長村で起こった神隠し（ムヌマイ）が語られています。ムラのクムイ（沼）

の中から正座した状態で発見されたムヌマイの女性、尻を三回蹴られて正気に戻ったといいますが、なんと不思議なお話で

すよね。

そんな春潮の日誌「大洋子の日録」は、青年期の春潮の思想や、親しかった友人・女性達の話だけでなく、当時の沖縄の情勢を知る事ができます。その中に、友人からきた手紙にわざわざ自分の注釈を入れたユーモアあふれる文章は、笑いを誘うと同時に、彼の人柄をうかがうことができます。

昭和三四年には、三〇数年ぶりに沖縄に戻り、各地で講演を行なっていますが、西原の我謝公民館でも春潮を招いた座談会が開かれたようです。

その当時の資料は残されていませんが、会に出席なさった方がいらつしやいましたら、ぜひお話を聞かせて下さい。

秋の夜長、春潮の著書を読みながら、西原という地域をみつめてみるのはいかがでしょうか？ そうそう、夕暮れや夜間は、ムヌマイされやすいよなので、みなさんも気をつけましょう。



比嘉春潮